

幼児の生活アンケート

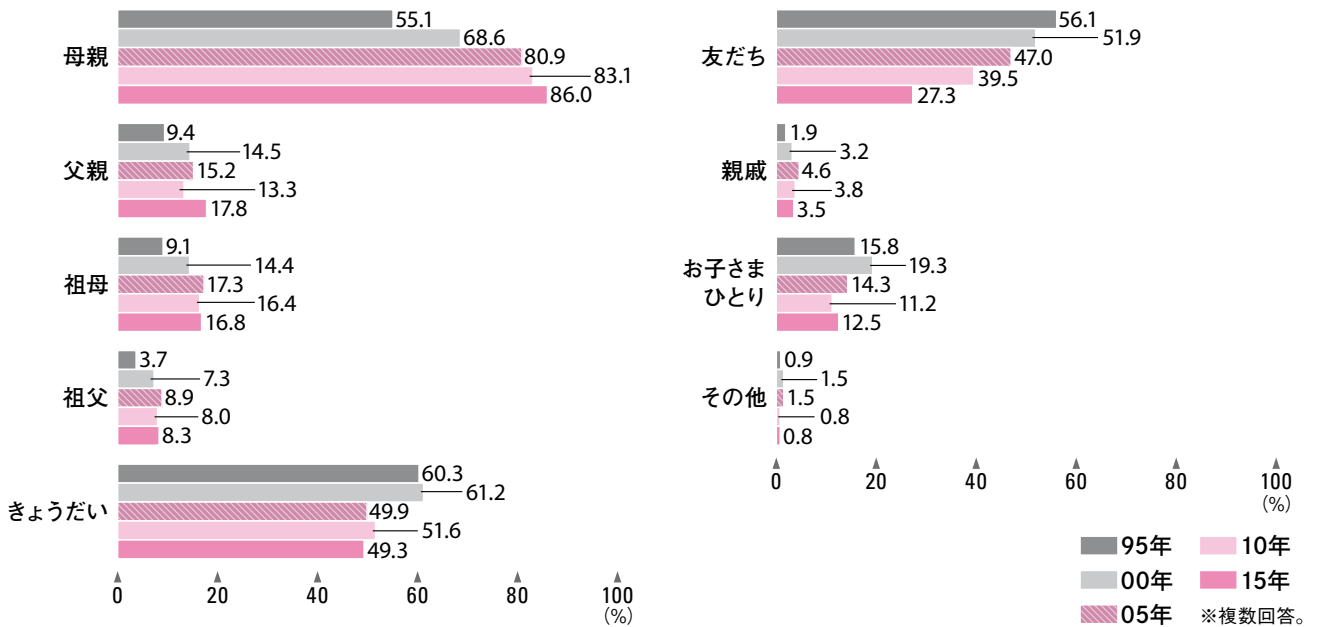
ベネッセ教育総合研究所では、首都圏の乳幼児をもつ約4000名の保護者のかたにご協力いただき、幼児の生活の様子、保護者の子育てに対する意識や実態を調査しました。この調査は、1995年にスタートし、2015年には第5回を迎えました。この20年で、幼児の生活や保護者の意識はどのように変化してきたのでしょうか。

引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用・転載される際には、調査名称を記載してください（例：ベネッセ教育総合研究所「第5回 幼児の生活アンケート」（2015））。

平日一緒に遊ぶ相手は、「母親」が増加して、「友だち」が減少

Q 平日、（幼稚園・保育園以外で）遊ぶときは誰と一緒にいることが多いですか。

図1 平日、（幼稚園・保育園以外で）一緒に遊ぶ人（経年比較）



研究員解説

平日、園以外で遊ぶことの多い相手を複数回答で尋ねたところ、この20年間で「母親」が55.1%から86.0%へ30.9ポイント増加しました（図1参照）。一方で、「友だち」は56.1%から27.3%へ28.8ポイント減少、「きょうだい」も60.3%から49.3%へ11.0ポイント減少しています。

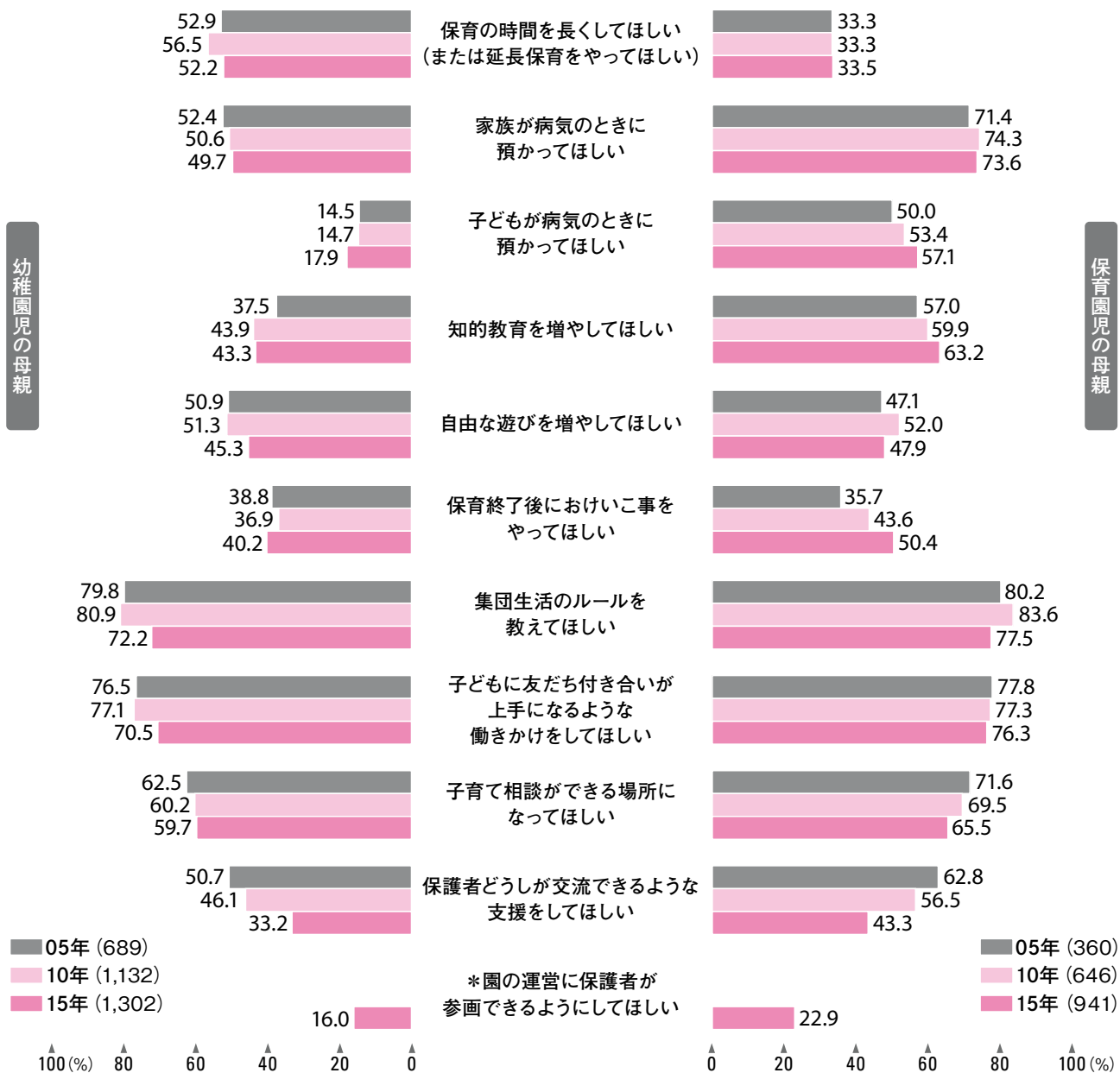
「友だち」が減っている背景には、降園時刻が遅い保育園児が増加していることや、少子化により地域で遊べる子どもが少なくなっていることなどが関係していると考えられます。幼児が園以外で同年代の子とも遊ぶ日常的な機会が減少していると言えるでしょう。

真田美恵子◎ベネッセ教育総合研究所主任研究員。幼児教育・保育や子育てなど、園や就学前の子どもをもつ家庭を対象とする調査研究に携わる。

10年間で、 とくに保育園への要望が多様化

Q 現在通っている幼稚園・保育園について、あなたは次のことをどう思いますか。

図2 幼稚園・保育園への要望（就園状況別 経年比較）



※「とてもそう思う+まあそう思う」の%。 ※子どもを園に通わせている人のみ回答。 ※母親の回答のみ分析。
※「*」は15年調査のみの項目。

研究員解説

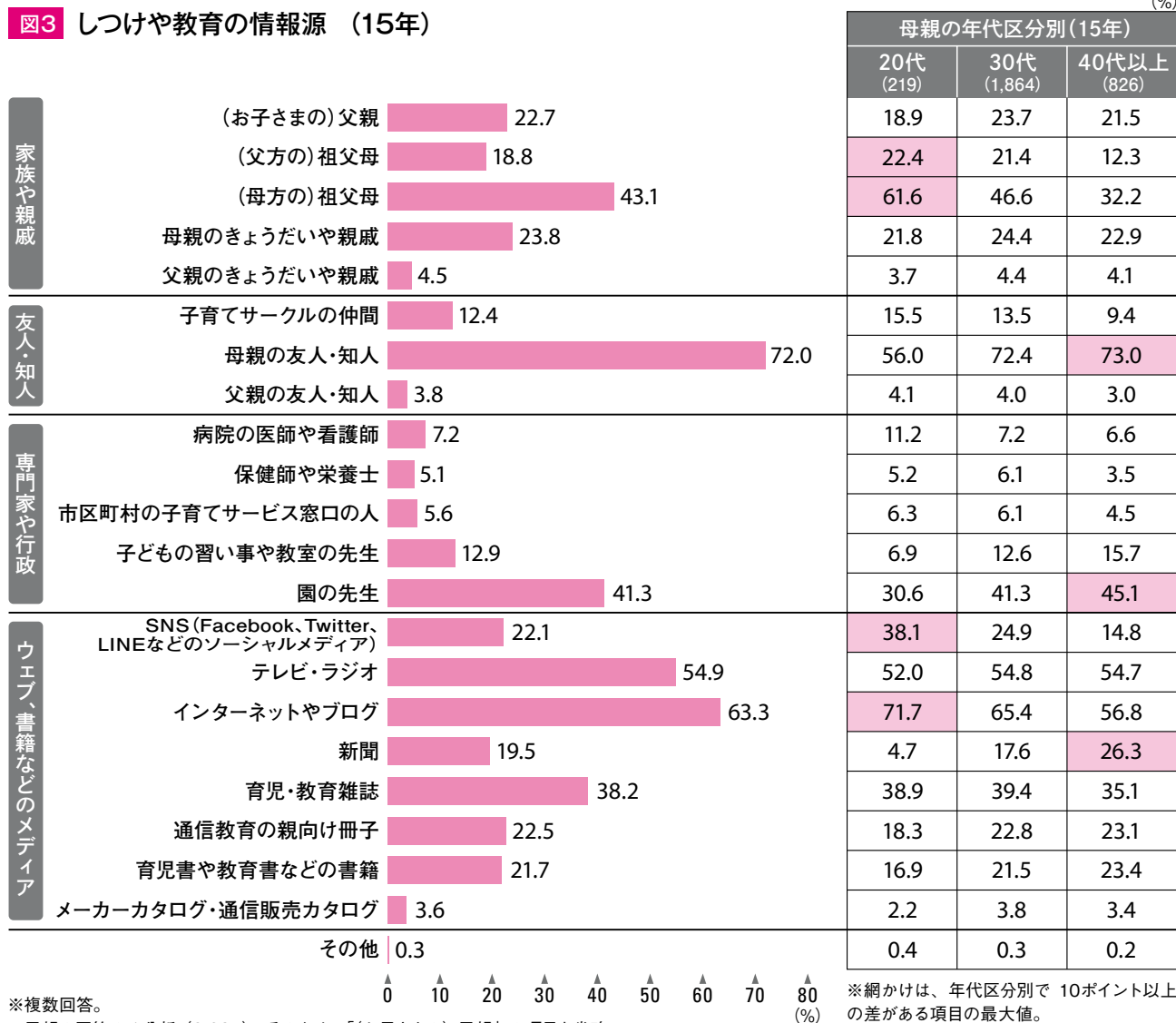
次に、現在通っている園への要望を尋ねました。上位は「集団生活のルールを教えてください」「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」が7割以上であり、幼稚園児・保育園児の母親ともに子どもの社会性の育ちを園に期待する傾向は変わりません(図2参照)。また保育園児の母親では、「子どもが病気のとくに預

かってほしい」が10年間で50.0%から57.1%に7.1ポイント増加、「知的教育を増やしてほしい」が57.0%から63.2%へ6.2ポイント増加、「保育終了後におけいこ事をやってほしい」が35.7%から50.4%へ14.7ポイント増加しています。子どもが長時間過ごす保育園への要望が、とくに多様なものになってきていると考えられます。

しつけや教育の情報源で、 「園の先生」は41.3%と上位

Q 現在、あなたは「お子さまのしつけや教育」についての情報をどこから（誰から）得ていますか。

図3 しつけや教育の情報源（15年）



※複数回答。

※母親の回答のみ分析（3,287）。そのため、「(お子さまの)母親」の項目を省略。

※網かけは、年代区分別で10ポイント以上の差がある項目の最大値。

研究員解説

しつけや教育の情報源を複数回答で尋ねました。多い順に「母親の友人・知人」72.0%、「インターネットやブログ」63.3%、「テレビ・ラジオ」54.9%、「(母方の)祖父母」43.1%、「園の先生」41.3%となりました(図3参照)。幼児の母親は、親族や友人・知人、ウェブ、専門家などさまざまなところから情報を得ているようです。

母親の年代別にみると、20代のほうが40代よりも10ポイント以上高いのは、「(父方・母方の)祖父母」、「SNS」、「インターネットやブログ」でした。40代以上のほうが20代よりも10ポイント以上高いのは「母親の友人・知人」、「園の先生」、「新聞」でした。母親の年代により、子育てに関する情報源が異なる傾向がみられました。

出典：第5回 幼児の生活アンケート

調査対象：0歳6カ月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者4,034名。本分析では、95年からの比較を可能にするため、1歳6カ月以上の幼児をもつ保護者の回答(3,466名)のみを分析。

調査時期：2015年2～3月

調査地域：首都圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)

調査方法：郵送法(自記式アンケートを郵送により配布・回収)

調査項目：子どもの基本的な生活時間／習い事／メディアとの関わり／遊び／母親の教育観・子育て観／子どもの将来への期待／今、子育てで力を入れていること／母親の子育て意識／夫婦の家事・子育て分担／子育て支援など

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。ぜひご活用ください。▶ <http://berd.benesse.jp/>

保護者を取り巻く環境が変わる中 園の保護者支援も変化する



今回の調査は、幼児の生活のあり方の変化を20年という大きな時間の中で見るものです。社会環境が大きく変わる中で、園にはどのような役割が求められているのでしょうか。調査企画・分析メンバーのひとりである目白大学人間学部子ども学科の荒牧美佐子先生にうかがいました。

目白大学 人間学部 子ども学科専任講師

荒牧美佐子

あらまき・みさこ

専門分野は発達心理学。乳幼児をもつ母親の育児感情、園における子育て支援の効果検証、幼児期の家庭教育が子どもの発達に与える影響などについて研究を行う。

友だちづくりにおける 園の役割が大きくなる

この20年間で、最も変化が見られたのは「平日、(幼稚園・保育園以外で)遊ぶときは誰と一緒に場合が多いですか?」という項目です(P.14 図1参照)。「母親」という回答は86.0%に達した一方、「友だち」は27.3%にとどまっています。

とはいえ、母親が子どもどうしの関わりを軽んじているわけではないようです。今回の調査では「子どもがよくする遊び」も聞いていますが、体を使って友だちと一緒に遊ぶことを母親はますます大切にしているからです。つまり、友だちと遊ばせたくないというよりも、友だちと遊ぶ機会がなかなかつくれず、結果的に母親と過ごす時間が増

えているという面もあると考えています。その意味では、「友だちづくり」に関して園の果たす役割がますます大きくなっていると言えます。

ただ、小規模園ではずっと顔見知りのメンバーと関わり続けることになります。異年齢の子どもや地域の大人が園に入ってくる活動の重要性が、今後はさらに高まるでしょう。また、休日に行われる地域の交流の場を保護者に紹介するなど、他者との関わりから学ぶ機会を園の外にも少しずつ広げてみるような声かけもますます大切になると思います。

保育者の説明力が ますます重要に

しつけや教育の情報源として、20代の母親は主に「SNS」「インター

ネットやブログ」から情報を得ることがわかりました(P.16 図3参照)。20代の母親は幼少期からインターネットに親しんでいる世代ですが、子育ての疑問や不安があっても、どういうふうに質問すればよいかわからないため、気がねせずに相談できるインターネットを選んでいるのかもしれませんが。

インターネットの情報は、わが子の状況に合ったものとは限りませんが、多くの情報が行き交うため、いろいろな人のアドバイスを聞いたような錯覚に陥り、「ネットではこういう意見が多かった」と聞きかじりの知識に振り回されてしまう保護者もいるようです。情報過多の保護者が増えていく中で、今後ますます、園は保育の狙いを明確に説明する必要があるでしょう。「いろいろな考えがありますが、本園ではこうした理由でこの方針を取っています」と、わが子と園の関係の中で具体的に理解できるように、より丁寧に説明することが求められると思います。

これまでなら「言わなくてもわかる」と考えられていたことを、「なぜそれは子どものためになるのか」と説明することは、確かに手間のかかることかもしれません。しかし、そうしたコミュニケーションの中で保護者の子ども理解は進み、また、保護者と語り合う中で保育者の力量がさらに高まり、保育の質をより高めることにつながるはずです。

